

中島力男さんに聞く八田與一の魅力



なかしまりきお

中島力男さん

1905年大分県宇佐市生まれ。1924年東京農学校（現 東京農業大学）農学科に進学。1930年より嘉南大圳の灌漑施設管理・運営に関わる。1933年より嘉南大圳組合水利課長を務め、終戦後日本に帰国。現在大分県宇佐市在住。

特集

中島さんは、どういった経緯で嘉南大圳に関わられたのですか。

大学を卒業後、台湾の新高製糖（現在の大日本明治製糖）に勤めたんです。その頃、農業がわかるやつ、ということで嘉南大圳組合（現在の嘉南農田水利会）に呼ばれたんです。当時は、灌漑施設を管理・運営する側の人間はいなかったんです。

八田與一とは、一緒に仕事をされたのですか。

八田さんは、ダムを造った人、私はそれを運営する人。だから、一緒に仕事はしてはおりんです。ただ、運営をする際に、何か問題があると台湾総督府に戻っていた八田さんのところには相談にいきました。

八田與一との出会いのきっかけはどんなものだったのですか。

昭和5年（1930年）の4月、まだ面識もないのにいきなり電話がかかってきたんです。ちょうどその時不在で、あとからかけ直すと、ちょっと来てほしいという。それで会いにいったんです。稲やサトウキビを作るのに、どのくらいの水がいるのかなどを聞かれました。それがきっかけです。

印象はどんな感じの人でしたか。

人から話を聞くことをためらわない人だな、ということです。今でも覚えているのは、八田さんに最初に会ったとき、「内容は覚えなくてもいいんだ。必要になった時にまた聞けばいいんだから。」と言っていたことです。彼は、人から話を聞いて、偉くなっていったんです。水利の主な部分は農業なんです。多分、はじめは農業のことはわからなかったと思います。でも質問されて、調べていくうちにわかるようになっていったんです。

中島さんからみた八田というのはどんな人物だったのですか。

非常に探究心が強い人ですな。私が水利課長をしていた頃も、いろんなことを聞いてくるんです。だから、土木だけでなく、農業についても詳しいんですね。例えば、水稻であれば毎日の水量はどのくらいか、というのは資料を見ればわかる。しかし、灌漑の場合、水路の損失水量とかも考えておかななくち

やいけないわけです。八田さんはその辺も全てわかっておりました。しかもハワイやアメリカの農業も見ているから、最先端の農業を知っているわけですよ。珍しいほどの勉強家ですよ。

他にはどのようなことを感じられましたか。

八田さんは、分からないことがあった時、誰に聞けばいいかというのがすぐに分かる人なんですね。それと外国語が出来るので、海外でもいろんなことを発表していましたし、海外から人が来ると自分で案内していましたね。

博識で、人の意見も聞くんですが、言い出したら聞かない。しかも、あの人以上に調べている人はいないから、誰も太刀打ちできないんですよ。

これは僕の意見だが、彼は土木技術者であったが、政治家としても成り立っていたと思います。

貴重なお話をありがとうございました。



烏山頭ダムの堰堤

八田與一の名は水利の関係者でない限り、土木の分野ではあまり知られていません。しかし、彼が造った烏山頭ダムと濁水溪取水施設、そして総延長1万5000kmにも及ぶ灌漑水路は、確かに嘉南平野の人々を潤し、生活を支えています。そして、徐さんのように八田與一を語り継ぐ人がいます。これは、八田與一の台湾への想いが通じたからに他ありません。必要な土木事業というのは、感謝こそされても決して批判されるようなものではないのです。われわれが八田與一から学ぶべきことは非常に多いと思います。

今回の記事を書くにあたり、土木学会台湾支部事務局長の許鎧麟氏、および正修技術学院講師の柯武徳氏そして、土木学会国際室の中島砂智子氏には大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

参考文献

加古里子・緒方秀樹著：土木の絵本・海をわたり夢をかなえた土木技術者たち、(財)全国建設研修センター

古川勝三著：台湾を愛した日本人、青葉図書（版元品切れ）

齋藤充功著：百年ダムを造った男 土木技師八田與一の生涯、時事通信社（版元品切れ）

司馬遼太郎著：街道をゆく40 台湾紀行、朝日新聞社

【鈴木、春井】

私の原点

高2のとき、親父に「工学部に進みたいんやけど学科は何がええんやろ？」と相談したら、「男は、やっぱり土木よ」と言われ、即決しました。

匿名希望（沿岸海洋学，40代）